
魔法少女リリカルなのは 無限の英知の一存

正義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは

無限の英知の一存

【Nコード】

N9590T

【作者名】

正義

【あらすじ】

これは、時空管理局最高評議会の手により造り出されたもう1人の異端児『無限の英知』の物語。

『闇の書事件』から4年。ユーノはある日、謎の光によって稀少技能と聖魔の力に目覚める。しかしその事が切っ掛けで、管理局の暗部組織に襲われていた彼を救ったのは、“元碧陽学園生徒会副会長”及び“碧陽帝国建国者兼永久名誉元師”杉崎鍵だった。タイトルとあらすじ変更しました。

存在しえない記憶（前書き）

勢いでやってしまいました。

反省してますが、後悔はしてません。

また今作は生徒会の一存と魔法少女リリカルなのはのクロスオーバーですが、オリ設定や多数のオリキャラが出てくるので悪しからず。

存在しえない記憶

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

薄暗い森の中。1人の女性が血相を変えて走っていた。その両腕に赤子を抱えながら。

「待て！」

そしてそんな彼女を追い詰める杖を持った数人の男達。その中の1人が女性に杖を向ける。すると杖の先端から光線が飛び出し、女性へと飛んでいく。

「クッ！」

それに対し、女性が右手を後ろに向けると、右掌の前に魔法陣が現れ、光線を防ぐ。

他の男達も女性に向かって光線を放っていく内、遂に光線の一つが女性の右足を掠める。

「あう！」

足下に激痛が走り、前のめりに倒れる女性。なんとか赤子に怪我はなかったが、女性の右足からは血が流れて出ている。

「くう、……！」

苦痛に顔を歪めながらもなんとかその場から逃げ出そうとする女性に、突如として光の鎖が巻き付く。そしてそこに男達も追いつき、女性を取り囲む。

「ハア、ハア。たくつ、てこずらせやがって」

その中の1人、リーダー格と思われる男が言葉を発する。

女性は鎖に絡められながらも、赤子を守るように抱え込み、男を睨み付ける。

「さあ、さっさとそいつを渡せ。そうすれば命だけは助けてやろう」

「嫌よ！誰が渡すもんですか！この子は普通に生きていくのよ！あ

の子の“ジェイル”二の舞には絶対にさせない！」

女性の言葉に、男は心底残念だと言わんばかりに杖を向ける。

「……あなたは有能だと思っていたんだが、どうやら見込み違いだったようだな」

男の言葉と共に、他の男達も女性に杖を向け、各々の先端に光が集まる。(このままじゃ、やられる！私はどうなってもいい。でも、せめてこの子だけは！)

女性は首もとに掛けてあつた紅い宝石に語りかける。

(レイジングハート、お願い！私が時間を稼ぐから。その間に強制転移魔法でこの子を)

(しかし、そうなればマスターは)

(いいのよ。私はもう償いきれない罪を犯したんだから。正義の為だなんだと言つて、我が子のように可愛がつてたあの子を、私は咎人にしてしまった。今更どう足掻いたつて、地獄行きは免れないわ)

(マスター……)

(だからお願い、レイジングハート。

この子を守って上げて)

(……了解しました。“マイマスター”私が絶対に“マスターの子供”を守り抜いてみせます)

(ありがとう。レイジングハート)

女性が宝石に礼を告げると、男達の向けた杖が収束し終え放たれようとした時、

「テストメント！」

「……!?」

言葉と共に女性の体が発光し、光線を放とうとした男達は光線の発動を止め、目を瞑ってしまう。

(今よ！)

(強制転移！)

その隙に、女性の首もとから赤子に掛けられた宝石が、別色の光を発光する。

「なっ！これは強制転移魔法！」

「そいつを止める！止めるんだ！」

しかし、男の言葉虚しく、赤子と宝石は光が治まると同時に跡形もなく消えてしまった。

「……さ、探せ！探索魔法を使え！まだ近くにいるはずだ！」

リーダー格の男が部下に命じ、数人の男達が散っていく。

「隊長、この女はいかがいたしましたしょう？」

「殺せ。その女に用は無い。殺生設定の使用を許可する」

「はっ！」

リーダー格の男の言葉で、再び男達が杖を女性に向ける。女性はどう逃げ事も防ぐ事もしなかった。いや、出来なかった。

(ごめんね、ジェイル。ごめんね)

数本の杖の先端に光が宿る中、女性が心中で2人の人物に謝罪の言葉を送る。それは我が子同然と思いつつながら、咎人としての道を歩ませってしまった子の名。

そしてもう1人は……

「討て！」

男の号令の元、複数の光線が女性に向かって放たれ、

(ユーノ)

直後爆発が起こり、大地には焼け焦げた痕跡だけが残された。

存在しえない記憶（後書き）

感想や指摘・アドバイス等々、心よりお待ちしております。

第1話「狙われしユートノ・スクライア」(前書き)

長らくお待たせしました(誰も待ってないかもしれないが) 駄文ですが、第一話投稿します。

第1話「狙われしユーノ・スクライア」

新暦70年。

広大なる次元空間内にて一筋の閃光が迸った。

“それ”は2つの流星に姿を変えると、各々別方向へと飛んでいく。1つはまっすぐ次元空間内を飛翔していき、もう1つは真つ逆様に落下していくと、そのままある世界へと流れ落ちていった。

フェイト視点

「ユーノ君……」

隣に座るなのはが腕を組んで、祈るように呟く。

他の皆も同様に、憂いの表情を浮かべている。

今この場には、私やアルフ、なのははもちろん。はやてやヴォルゲンリッター、リンディ義母さんやエイミィ。更には先日艦長に就任したばかりのクロノまで。顔馴染みのメンバーが一同に会していた。ただ1人医務室で検査を行っているシャマルと受けてる“ユーノ・スクライア”を除いては。

……そもそもその原因は、次元空間内にて、謎の高エネルギー反応が観測されたことにあった。

2つに分裂した“それら”の内の1つは何処かの次元世界に落下。もう1つはこの本局施設へと直撃。本局のバリアを突き抜けた“それ”は無限書庫司書長ユーノ・スクライアへと直撃。ユーノはその場で倒れ医務室へと搬送されたのだった……

……因みにユーノ以外の人的被害や物理的被害はほとんど残っておらず、またもう1つのエネルギー反応についても現在、調査が行われている……

「全く。あのフェレットもどきめ。もしフェイトや皆を悲しませるような事をしてみる。地獄の果てまで追い回してやる」

クロノが皮肉った言葉を言うが、周りの皆がそれは照れ隠しだと悟った。何故ならその表情は親友の安否を心配する物だったからだ。

いつもは口喧嘩ばかりしている2人だけど、やっぱり友達なんだな

「……………」
重たい空気がこの場を支配する。

皆、懸念しているのだ。ただでさえユーノは最近、無茶をする事が多い。もし今回ユーノの中に入った未知のエネルギーが、彼の身に何か起こすんじゃないかって。

そして、思い出していたのだ。2年前、墜落した“なのは”のこ

ユーノ視点

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
誰かが、謝っている声が聞こえた。

それは女性の泣き声で、彼女は何度も何度も謝罪の言葉を繰り返す。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
い」

誰かは分からないけど、誰に対して謝っているのだろうか？

謝られる方も、これだけ謝っているのだから、許してやればいいの
に。

どんな間違いだって許されない事は無いはずだ。赦されない罪なん
て……

その時。2年前の“あの光景”が映し出さ

「!?!」

れて、僕の意識は覚醒した。

「ユーノ（君）！」

勢い良く上半身を起こすと、自身を声を聞こえたので、振り返って
みる。

しかしそこで、おかしな事に気付いた。

「ユーノ君！大丈夫？」

「良かった。目が覚めたんだね」

「全く。心配させやがって、このフェレットもどきが」

そこには、なのはやフェイト、更にはクロノまで顔馴染みのメンバ
ーが全員揃っていた。しかし、僕が異変を感じたのは、その事では
なくその“光景”だった。

何だ？これ……。

視界は赤く染まり、そこに収まる物体や人物の情報が事細かに頭に
流れてくる。

「白……」

「ユーノ君？」

思わず呟くと、なのはが怪訝そうな表情で覗いてくる。

「い、いや、何でもないよ／＼」
そう言つて誤魔化す為に両手で両目を拭い、もう一度視界を確認する。

しかし視界に映る光景には何ら変化無し。

「あら？ユーノ君。目が覚めたのね？」

と、その時。シャル先生が来て（当然シャル先生情報も頭に入ってくる）ようやくここが医務室だと確認できた。

「何か体に異常とか感じたりはしない？」

「異常ですか？そうですね……………強いて言うなら……………！？」

視界がおかしいですと、言おうとした時、僕は自身の中から未知の力が感じられる事に気付いた。

それは魔力に良く似ているが、全く別の力。しかもその総量はオーバースランク、いや、それ以上はあった。

と、そこで僕はようやく自分が何故こんな場所にいるのかを思い出した。

確か、書庫の生理中に謎の光に当たって気絶したんだっただけ……………ということ、僕のこの未知の力は、謎の光の影響？

僕はシャル先生に自身の未知の力と視界の事を話した。

視界の事については皆一様に驚いていたが、未知の力に関してはシャル先生だけが、やっぱりかという表情だった。

「シャル。ユーノ君は一体どないなってもうたんや？」

はやてが皆を代表して尋ねると、シャル先生は困惑の表情で答える。

「詳しい事は技術部の人達が解析中だけど。ユーノ君の力を観測してみたら測定不可能って、出たらしいわ」

「え？」

「な！」

その言葉にある者は呆けた顔をし、またある者は驚愕の表情を浮かべる。

「どついう事なん？シャル。測定不可能って」

「そのままの意味よ、はやてちゃん。今のユーノ君の力は魔力量で換算すると、管理局の測定器では大きすぎて計りきれないのよ」

「……………」
皆、開いた口が塞がらないと言った感じに呆けている。もちろん僕も。

当然だろう。今までAランク相当の魔力量しか持たなかった魔導師が、いくら未知の力を得たとはいえ、管理局でも測定しきれない程の力を宿した。

これはあり得ないことである。

「とにかくもう一度詳しく検査してみる必要があるわね。もしかしたらユーノ君、稀少技能レアスキルに目覚めたのかもしれないし」

「レアスキル……………」

それは魔法とは違う特殊能力の総称。確かにそれならこの視界の事も説明できるかもしれない。

その後もシャマル先生は僕の検査結果を報告してくれる。
「どうやら、力の事や視界の事以外には、表立った外傷や内傷は見当たらなかったようだ。」

その報告に、僕以上に、皆が安堵した表情を浮かべる。

そんな中リンディさんが両手を叩いて、皆の注目を集める。

「それじゃ皆、各々の仕事に戻りましょうか。ユーノ君も大事には至らなかつたみたいだし」

「そうですね。まあ、僕は最初からユーノの事なんて心配してませんし」

「もう、クロノったら。素直じゃないんだから」

「何か言ったか？エイミィ」

「いいえ。何も」

「そうか。それじゃ僕達は次の任務があるから、これで失礼する。」

エイミィ、フェイト。行くぞ」

「はぁ〜い。じゃ、ユーノ君。また今度」

「ユーノ。体には気を付けてね。あっ！待ってよ！クロノ！エイミィ

「イ！」

クロノとエイミィさんが退室していき、フェイトも跡を追い掛けるように出て行った。

「主はやて。そろそろ我々も」

「そやな。あんまり長いも無用やから。私らはここで失礼させてもらうわ。行くで。ヴィータ、シグナム、ザフィーラ。リン」

そう言つて、はやてはシヤマル先生以外のヴォルゲンリッターを引き連れ退室していった。その後、リンデイさんやアルフも各々の持ち場に帰っていき、この場には僕となのは、シヤマル先生だけが残り「それじゃ、私も一度仕事に戻るわ。何かあつたらすぐ呼んでね。あつ！それと」

「？」

何故かそこで言葉を区切つたシヤマル先生になのはと2人首を傾げると、彼女はニヤニヤしながら言葉を紡ぐ。

「いくら2人きりだからつて、あんまりいちゃいちゃしちや駄目よ」

「え？ちよつ！シヤマル先生!？」

「／／／／／」

シヤマル先生はそう言い残して、部屋を退室していった。

「……………／／／／／」

後には、お互いに頬を赤らめ合う男女と気まずい雰囲気だけが残つた。

とある通話記録

「何!?!それは本当か」

「はい、間違いありません。奴はまさしく“全知の眼”の保有者です」

「ふむ、やはり奴がそうだったか。よし。ならば直ちに回収を」

「お待ち下さい。今そのような事をすれば、我らの存在が明るみになる可能性があります」

「ううむ。では、どうするといふのだ？」

「奴を遺跡調査の任務と称して、管理外世界へと赴かせ、そこで捕まえるのです」

「なるほど。それなら我らの存在が明るみになることもないし、遺跡調査の事故としても処理可能……上手く考えたな」

「お誉めに預かり光栄です」

「よし。人員と作戦の手引きはこちらで用意するお前は上手いこと奴を任務に駆り出せ」

「かしこまりました」

「ふっ、期待しているぞ“無限書庫副司書長カルス・エイダン”」

ユーノ視点

「遺跡調査、ですか？」

思わず聞き返す。

今僕の対面には、副司書長のカルス・エイダンさん（年上なので）が座っている。

彼の話とは、古代遺失物管理部から、あるロストログアの回収にある管理外世界の遺跡調査に向かうので、同行して欲しいというものだった。

僕はその話を聞いて、またかと溜息を吐く。

あの事故から数日。

詳しい検査も終了し、退院した僕は無限書庫への出入りを禁じられていた（原因はこの眼のせいだ制御が効かないくせに、視界に映ったものを片っ端から解析していくので無限書庫内の莫大な資料等眼にしたら、いくら僕でも脳がパンクしてしまうらしい）

その間。僕は何をしていたかというと、技術部や遺失物管理部の方々に引つ張り出されていた。

技術部の人達は、僕の眼や力の事をもつと調べたがっついていて。管理部の人達は、ロストロギアの回収を手伝ってほしい（この眼はロストロギアの解析さえもしてしまうらしい）との事だ。

「機動二課から、ある管理外世界のロストロギアの眠る遺跡調査に同行して欲しいとのことなんですが、いかがなさいましょう？」

カルスさんがそう尋ねてくる。彼は僕が司書になつた頃からお世話になってる古参の司書で、僕が入院している間も司書達を纏めてくれたのだ。

「分かりました。引き受けましょう」

「よろしいのですか？」

「はい。他ならぬカルスさんの頼みですから」

もしこれがクロノからの依頼だったから、僕は確実に文句を言っていただろう。

「分かりました。では私の方から、そう連絡しておきますので」

「あっ、はい。よろしく願います」

「では、私はこれで。仕事が残っていますので」

そう言つて、カルスさんは退室していった。

「ふう」

カルスさんが退室していた後、僕は司書長室に設けられた椅子の上で溜息を吐く。

僕は何故か今回の依頼に関して、凄い悪寒を感じていた。カルスさんは比較的安全な調査だと言っていたが（というより、そうでない

と僕以外の人が反対するので、危険な依頼は持つてこられないらしい)
「……まあ、それでもやるしかないか。僕にはこれしか出来ないんだし」

そう言つて、僕は書き掛けだった論文の作成に取り掛かるのだった。

……しかし、僕はまだ気付いていなかった。この選択が、後に自分の運命を大きく変える人物との出会いの予兆だったなんて……

そして2日後

「ここが例の遺跡、ですか？」

「はい。この中から一級指定のロストロギア反応が観測されたんです」

隣に居る機動二課の隊員ロドリゲス・パルスイートの言葉に、僕は大いに驚いた。

……この男の言ってることは嘘だ……

この遺跡からは何の魔力反応も感じ取れない。当然ロストロギア等存在する筈がない。

なのにロドリゲスはこの遺跡にはロストロギアがあると言う。矛盾している。

「どうかなさいましたか？スクライア司書長。あっ！もしかしてもう遺跡の解析が完了したとか！いやあ、仕事が速くて助かりますなあ」

ロドリゲスはそう言って、快活そうに笑う。

僕はそれに、戸惑いながら答える。

「い、いえ、そうじゃなくて。あの、この中からは何の反応も感じられないんですが」

そう言うと、ロドリゲスは嘲笑しながら応える。

「そんな筈はありませんよ。我々はここに“ロストロギアの回収”

に来たのですよ。それなのに何の反応も無いなど」

「い、いや、でも本当にこ」

と、言いかけたその時。

左肩に激痛を感じた。

「!?!」

膝を着き、左肩を手で抑える。そこには何か貫通した痕があった。僕は後ろを向くと、そこには質量兵器をである拳銃を持った数人の局員がいた。

そしてロドリゲスの声が響く。

「だから言ったでしょ。我々はロストロギアを回収する為にここに来たんだと。そう“あなた”というロストロギアをね」

僕はその言葉と今の状況で確信した。

やっぱりこいつら最初から僕を誘拐する気だったんだ。本局じゃ他の局員に見つかる可能性があるおまけに今の僕は簡単に魔法効かない（例の力のせい）だから質量兵器を持ち出したのだろう。

しかし、一体どこにそんな物を？さっき見た時はそれらしい物は何も見えなかった筈。

……ま、まさか

「召還魔法」

ポツリと呟くと、これまたロドリゲスの快活かつ下品な笑い声が聞こえてくる。

「よくぞ気付かれましたな！その通りです。いくらあなたでもその場に無い物の快活等出来ないでしょう。だから隠しておいたんです」僕はその笑い声に嫌悪感を現しながら、どうにかこの状況を脱しよ

うと並列思考を展開させる。

しかし、それを先回りするかのように、ロドリゲスが口を紡ぐ。

「ああ、動かないで下さいね。さもないと、また2年前の“高町なのはの事故”のような事が起きるかもしれないよ?」

「!？」

その言葉に一瞬、思考が止まる。

こいつ、まさか。

「なのは達を人質に」

「逃げたければ逃げても構いません。ただ、彼女達がどうなるかは知りませんか?」

そう言つてロドリゲスは再び下品な笑みを浮かべる。

僕は、何も出来ず、うなだれた。

今のこの状況から抜け出す自信はある。けどそうすればこいつらは真っ先に牙をかけるだろう。何しろ管理局が禁止している質量兵器まで持ち出して来るんだ。特にはやては『闇の書の主』という事で、未だに管理局内部に根を持つ人間は大勢いる。逆恨みの犯行として処理されるだろう。

「ふふ、聞き分けの良い子は好きですよ。なに、心配なさらずとも我々は別にあなたに危害を加えようというわけじゃない。ただ新しい職場を提供しようと思っただけさ」

悔しさの齒軋りした。

恐らくこいつらは僕を、違法な場所へと連れて行くのだろう。管理部には、一部の上層部が違法研究を行っているという噂もあるから。僕は、自分がどうするつもり事も出来ない事に気づき、うなだれる。「では、参りましょう」

と、ロドリゲスが言いかけた時。

「杉さキック!」

「ぐばっ！」

「……!?」

突然“何か” ロドリゲスを蹴り飛ばした。

勢い良く吹き飛んでいくロドリゲス。そしてそんな彼を蹴り飛ばしたのは、茶色黒が混じったような肩まで伸びる髪をし、赤と緑のオツドアイを持つ青年だった。

「……」

他の局員達が呆然としている間。僕は能力で見た青年の名を呟いた。

「杉崎鍵」

と、そこでようやく膠着状態が抜けた局員の1人が、青年 杉崎鍵に銃口を向ける。

「貴様！何者だ!？」

「俺か？俺は」

局員の質問に、杉崎鍵は親指で自分を指差し、高らかに宣言した。

「通りすがりのハーレム王だ！」

……これが後に、僕の師匠となる杉崎鍵。その出会いの場面であった……

第1話「狙われしユーノ・スクライア」(後書き)

本編ではしなかったのでユーノについての補足説明をしておきます。まずユーノが手に入れた未知のエネルギーは破魔力といって、魔力と魔を退く力退魔力が合わさった力です。そのためユーノには魔法が通用しない(ヘイムダルのような完全物理攻撃は別だが)

次にユーノが得たレアスキルの名は『全知の眼』これは視界に映った物体の情報を瞬時に読み取る事が出来る能力。この能力で人間を見れば、その人物がどんな人なのかすぐに分かる(ただし心中は無理。精神に関する事は解析出来ない)
以上です。あつ！因みにユーノは破魔力を得た影響で銀髪紅眼になつちやつてます。

それではまた次回会いましょう。

第2話「邂逅する二人の破魔師」(前書き)

訂正しました。

第2話「邂逅する二人の破魔師」

1時間前

杉崎視点

「ここか……」

辺りを見回しながらぼつりと呟く。

周囲には、岩石や枯れ木等の平地が広がる何とも乏しい光景が広がっていた。とてもじゃないが、人が住める環境じゃない

……しかし、この世界の何処かにいるはずだ。

俺や善樹と同じ“破魔”の力を持つ者が。

数日前。

遠い次元空間の果てに破魔の波動を感じ取った俺は、善樹や新聞部（諜報部）の連中を差し置いて、単身捜索に出かけた。そして辿り付いたのがこの世界だった。

「世界に満ちる大いなる力の片鱗よ、我が求めしものを炙り出せ」

足元に魔法陣を展開し、この世界に満ちる魔力を使った界域探知魔法（世界という枠そのものに探知を掛ける）を発動させる。

「ワールド・オブ・ディテクション」

詠唱完了と同時に魔法陣から虹色の光が全方位に放たれる。
それと同時に目の前に展開した魔法陣にこの世界の図面が映し出される。

……1分後。

「……見つけた！……いや、待てよ？」

図面のとある箇所には灰色の点滅（破魔力）とそれ囲むように複数黒色の点滅（魔力）の反応が描かれていた。

どうやら、破魔の力を持つ者が、複数の魔力を持つ者達に囲まれているようだ。

……こいつは……もじゃ！

「汝、我が水面に真実の虚像を」

もっと詳しく状況を知ろうと、右手を図面に翳し追加詠唱。

「トゥルー・ア・パーズブル」

詠唱完了と同時に、目の前の魔法陣に映像が映し出される。
そこに映っていたのは、

……銀髪の少年が、複数の銃器を持った男共に囲まれている光景だった……

「……あちゃ、先をこされたか」

後頭部を後ろ手で掻きながら嘆息。

本当はこうなる前に接触したかったんだがなあ。

“破魔”の力は強大だ。

その力は魔法技術を持っている連中からすれば、喉から手が出る程

欲しい代物だ。俺は新聞部の調査で、この周辺の多世界を統治している“時空管理局”の存在を知っている。

その組織が裏で違法研究を行っている事も。

「まずいな。こりゃ」

俺は映像を見ながら、顔をしかめる。

銃器を持った男達のリーダーらしき男が銀髪の少年に対し、脅迫としか言えない言葉を放つ。

このままだと少年は人体実験の被験体にされてしまうだろう。

映像に映る男達が着ている服装は、彼の組織の制服であり、しかも奴らが持つ銃器はこの周辺多世界では禁止されている。間違いなくこいつ等は彼の組織の暗部の人間だろう

「『逃亡群鶏』発動」

俺は銀髪少年を助けるべく自身の固有能力『逃亡群鶏』を発動させ急ぎその場から“逃げ出した”

そして現在に至る

「通りすがりのハーレム王だ！」

銀髪少年の所まで逃げ出した俺は、とりあえずリーダー格の男にドロップキックをかまし、某デケドのような決めポーズで自身の事を告げた。

「……………」

呆然とする一同。因みに蹴り飛ばした男は泡吹いて気絶している。

「ふ、ふざけるな！」

沈黙した空気を撃ち破るように、男達の内の1人が銃口をこっちに

向け、発砲してくる。

やれやれ。最近の若者は血気盛んだねえ。

「よっと」

俺はそれを左方に動く事でかわし、銀髪少年を片手で掴み上げ、脇に抱える。

「え？」

「なっ!？」

銀髪少年と男達が各々素っ頓狂な声と驚愕の声を上げる。

「貴様!それは我らの

“所有物”だぞ!どうするつもりだ!？」

人を物扱いした男達の1人の発言に、一瞬憤りを感じたが、何とかそれを抑え込み、鼻で笑う。

「フン!決まっている。こいつは“俺達”が頂いていく!」

「何!？」

俺“達”という言葉に一瞬男達が辺りを窺う。仲間がいるのかと思っ
ているのだろう

俺は単身1人でここまでやってきたのだから、当然他の連中はいない。

だが、その一瞬さえあれば充分だった。

「さらばだ!」

言うが早いか俺は全速力でその場から逃げ出していた。

「うわあああああああ!!!」

銀髪少年が叫び声を上げる。

当然だろう。今の俺の逃走速度は約1000km/h。新幹線の約5倍もの速度で逃走中なのだから。とはいえ、ちゃんと少年に衝撃が来ないよう緩和魔法を張ってあるから大丈夫なのだが、どうやら突然の事態に戸惑っているだけのようだ。

「おい、少年。大丈夫か？」

逃走しながら、俺は少年の安否を確かめるため、声を掛ける。

「……………」

しかし、返答はこず。

気になって顔をのぞき込むと、少年は目を回して気絶していた。

「……まあ、いつか」

流星にやりすぎたなとは思ったが、よく考えれば気絶していてくれた方が都合が良かったので、俺はそのまま少年を放置。

そして脇に少年を抱えたまま『この世界からの逃亡』 『連続次元転移』へと移った。

一方その頃

「おい！どうなっているんだ!？」

X級艦船『ベオウルフ』にて、艦長シンジ・マツウラ提督の怒号が響く。

無理もないだろう。なんせ後一步で貴重な人材が確保できようかという時に、突然の奇襲。そして拉致。現場にいた機動二課やその世界の衛生上で監視をしていた『ベオウルフ』のメンバーは大いに慌てていた。

「も、申し訳ありません！提督。我々がいながら対象を逃がしてしまいました」

通信画面の向こうで先程の気絶から目覚めたロドリゲスが、シンジに頭を下げる。

「そもそも何でそんな近くまで接近を許したんだ!？貴様ともあるう者が!」

「そ、それが、私も完全に油断していたもので」

「くそつ、管制官！反応は?」

シンジは舌打ちして、管制官に状況確認を取る。

「……っ、ダメです！反応消失しました。」

「探せ！まだどこかに居るはずだ。何が何でも探し出すんだ！」

シンジが『ベオウルフ』や機動二課の面々に指示を飛ばす。

彼は焦っているのだ。

もしユーノを見つけれられず連れてくる事が出来なければ、上層部からどんなお咎めを受けるか分からない。それほどまでに彼らにとって今回の任務は重要だということだ。

「提督！」

「何だ！？」

「ちよっと、これを見て下さい！」

そう言つて通信士は『ベオウルフ』のメンバーに見えるようにモニターを開いた。そこに映るのは二つの銀色の点滅。

「あの襲撃者と今回の捕獲対象を比較してみました。この二人から同等のエネルギー反応が検出されたんです」

「何！？」

「……！？」

通信士の告げた言葉に、シンジもその他の者達も驚愕に目を見開いた。

あのユーノ・スクライアと同じ力を持つ者が、ユーノを連れ去った。これはつまり……

「同族を助けに来たということか」

「明確には分かりませんが、おそらくは……」

通信士の告げた言葉に、シンジは「そうか」と言つて、更なる指示を出した

「ならばその男も捕獲対象だ！何としても捕まえる！いいか、何としまだ！」

「……り、了解」

シンジの号令に『ベオウルフ』メンバーや機動二課の面々も、ユーノの搜索を再開する。

だが、時既に遅し。

ユーノも杉崎鍵も既にこの世界には居らず、結局彼等は上層部はお叱りを受けることになるのだった。

なのは視点

「……え？」

私はその告げられた事実にも、思わずそんな言葉しか出て来ませんでした。

周りにいるフェイトちゃんは顔を伏せ、はやてちゃん達も信じられないという表情をしています。

今日。クロノ君に集められた私達は、そこでクロノ君から信じられない情報を提示されました。

「なあ、クロノ君。もう一度言うてくれるか？ユーノ君がどないしたって？」

そうはやてちゃんが尋ねると、クロノ君は溜め息混じりに言いました。

「もう一度言うぞ。よく聞いておけ。」

「ユーノが誘拐された」

「！？」

今度は言葉を出すことも出来ませんでした。

「……詳しく教えてくれへんか？クロノ提督」
はやてちゃんがクロノ君に詳しい説明を要求しました。私もそれに耳を傾けます。

クロノ君の話によれば、ユーノ君は別世界の任務の時に何者かの襲撃を受け、そのまま攫われたといっています。

私はそれを聞いて頭の中を頭の中が真っ白になっていくのを感じました。

ユーノ君がユーノ君がユーノ君がユーノ君がユーノ君がユーノ君がユーノ君がユーノ君がユーノ君がユーノ君が

「今の所犯人からの犯行声明は送られて来ていない」

「犯行声明が送られてこない？ちゅうことは犯人の目的はそういう身の代金とかじゃないってことやるか？」

「分からない。とにかく今はマツウラ提督達が全力で搜索に当たってくれている」

助けなきゃ 助けなきゃ 助けなきゃ 助けなきゃ 助けなきゃ 助けなきゃ 助けなきゃ

「助けなきゃ」

「え？」

私の咳きにクロノ君以外の皆がこっちを見てきます。クロノ君だけが真剣な表情をこっちを見据える中、私は徐に立ち上がって言いました。

「クロノ君！私もユーノ君を助けに生きたい！私も捜査に加えさせて！」

「何を言ってるんだ、なのは。君は戦技教導官だろ」

「それでも！私はユーノ君を助けに行きたいの！」

私は必死にクロノ君に懇願しました。しかしクロノ君から返ってきた答えは残酷なものでした。

「……………すまない。なのは」

「え？」

クロノ君は申し訳無さそうな表情で、言葉を続けます。

「上層部からの命令で僕達、いや、ユーノに関わりのある者全員のユーノの搜索を禁じられているんだ」

「え！？」

「「な！？」」

クロノ君の言葉にフェイトちゃん以外の皆が驚愕の声を上げました。

「そ、そんな、どうして！？」

私はクロノ君に詰め寄りました。

「分からない。何度上に問い質しても、駄目の一点張りで一定の情報すら与えてくれなかった」

「そ、そんな……」

私は信じられないというように、その場に崩れ落ちました。

「「なのは（ちゃん）！？」」

「おい！なのは！しっかりしろよ！」

ヴィータちゃんや他の皆が心配して駆け寄ってくれました。

「すまない、なのは。僕の力不足だ」

「ごめん、なのは」

クロノ君とフェイトちゃんの謝罪の声が聞こえてきたけど、私はその場から立ち上がる事が出来ませんでした。

「クロノ提督、本当に何とかならないんですか？スクライアはなのはにとつて、いや、我々にとつても大切な仲間だ」

「そやで。ユーノ君は私らとつて大事な仲間や。だから」

「分かつてる。だから僕らは今から上層部に掛け合ってみるよ」

「何かあったらまた知らせるから」
そう言つてクロノ君とフェイトちゃんは、部屋から出て行ってしまいました。

「……………」

「「なのは（ちゃん）……………」」

皆が心配してくれる中、私は暫くの間うなだれることしか出来ませ

んでした。

後日。結局ユーノ君を探す許可は降りず、事件は迷宮入りと化したのでした。

ユーノ視点

「……………ん……………あれ？ここは……………」

目が覚めると視界に紅く染まった天井が映った。

「おっ！目が覚めたようだな」

「!?!」

序で声が聞こえたので、振り向いてみると

「あ、あなたは!?!」

「よっ！林檎でも食うか？」

そこには片手に林檎を持つ黒茶髪のオツドアイの青年。あの遺跡から管理局暗部に連れ去られそうになった僕を連れ去った人物

「杉崎鍵」

「あれ？何で俺の名前を？」

小首を傾げる杉崎鍵 杉崎さん。

しまった！そういえば僕達自己紹介すらしてなかったんだ！

ほぼ初対面の人間に名前を言い当てられたら、誰でも不思議に思うものだろう。

どうする？この目の事を話すか？いや、いくら目からこの人の情報

が入ってきたとはいえ、信用できるかどうか別問題だ。

「え？あつ、いや、そのなんといいますか」

と、しどろもどろになりながら、内心どうするべきか思考を巡らせていると、杉崎さんは何かを思い出したように口を開いた。

「ああ！そういえばお前何でも解析しちゃう能力を持ってるんだっけ？」

「っ！？どうしてそれを！？」

それは本来ならなのは達や本局の連中しか知らないことなのに。

「そもそもここはどこなんですか！？あなたは一体何者なんですか！？何故あんなタイミングであんな所に現れたんですか！？教えてください！」

興奮が抑えきれなくなった僕は、杉崎さんの両肩を掴んで問い質す。
「お、落ち着け、少年。気持ちは分かるが、とりあえず落ち着け」

10分後

「えつと、話を整理すると、ここは未知の管理外世界で、あなたは僕と同じ破魔師と呼ばれる存在で、遠い次元空間で僕の反応を感じ仲間や部下を差し置いて搜索している内に、あの場に居合わせ、連れて帰ったと？」

「ああ」

「で、僕や管理局のことを知っていたのは、この世界の諜報機関の調査結果のせいなんですわね？」

「ああ。うちの新聞部は優秀だからな」

そう言つてニヤリと笑う杉崎さんに、僕はため息を吐く。

あの後、何とか落ち着きを取り戻した僕は、杉崎さんから事のあらましを教えて貰ったのだった。

「それで、僕はこれからどうなるんですか？」

「一番気になっていたことを聞いてみると、杉崎さんは申し訳無さそ

うな表情で、言葉を発した。

「そうだな……。このままお前を元の世界に戻すわけにはいかないから、暫くはここに居てもらおうことになる」

「そうですか……」

「まあ、心配することはねえよ。お前が元の世界に帰れるように色々対策は立ててあるからさ」

「は、はあ」

そう言っただけで林檎を感じる杉崎さん。

「あ、あのー！」

「ん？」

「どうして僕にそこまでしてくれるんですか？僕とあなた方は何の関係も無いのに」

僕は杉崎さんにもう一つ気になっていたことを聞いてみた。

すると杉崎さんは、悩む素振りした後、如実にこう口にした。

「んー、強いて言うなら“同族を見捨てられなかった”ってところかな」

「……そうですか」

この人は大物だ。

いや、一国の建国者なんだから、当たり前なんだろうけど。

僕はこの杉崎鍵という人物から、何か人の根元としての大きさを感ぜずにはいられなかった。

「他に聞きたいことはないか？」

「聞きたいこと……ですか……」

「ああ。答えられることなら、何でも答えてやるぞ」
そう言われて、僕は思い悩む。

もう聞きたいことは、あらかた聞いたので「もういいです」と答えるように思ったが、その直前あることを思いついた。

「あ、あの、聞きたいことというか、お願いがあるんですけど。いいですか？」

「？構わねえぞ。ここから出たいっていうこと以外なら、ある程度」

「ありがとございませすそれじゃ」
了承を得た僕は、早速そのお願いを言ってみることにした。

「僕を鍛えて下さい！」

「何？」

杉崎さんが訝しげに表情をゆがめる中、僕はその理由を話した。

僕となのはとの出会い。なのはの墜落事故。そしてその事故で僕が感じた後悔も。全て。

「……………」

「分かっているんです。なのはが墜ちたことと僕が出会ったは関係ないのだと。でも、それでも、僕はこう思ってしまったんです。“僕がもつと強ければ、なのはと会うこともなく、彼女が大怪我することもなかったんだって”」

語っているうちに、暗い感情が湧き出てくる。

僕の短い人生の中で、あれほど後悔した時はなかった。

「僕もう嫌なんです。自分が弱さも。なのはに何かあっても他の皆みたいに、彼女の傍で守って上げられないのも」

僕は勢いそのままあの日以来ずっとため込んできた気持ちを全て吐き出した。

僕はあの事故以来、自分の身体に鞭を打ち、仕事をしまくり、時間を空けば、クロノやザフィーラさんに鍛えてもらっていた。

強くなりたかった。

大切な人が傷付いていくのを、ただ黙ってみているのはもういやだから。

だからこそ、僕は杉崎さんに志願した。この人の元でなら今より強くなれると思えるから。弱い自分と決別出来ると思っただから。

「……………」

暫し沈黙を貫いていた杉崎さんだったが、唐突に口元に笑みを作る

と、言葉を発した。

「ふっ、いいだろう」

「えっ！それじゃ！」

「ただし！一度約束したからには、途中で止めたりしないで。例えお前がどんなに辛くても。それでもやるか？」

「はい！やります！やらせて下さい！」

「よし！気に入った！ユーノ・スクライア！お前を今から俺の弟子として認める。俺の事は今日から『師匠』と呼ぶように！」

「はい！師匠！」

こうして僕の修行の日々は、幕を開けるのであった

待っててね、なのは。僕は必ず強くなって帰ってくるから。

第2話「邂逅する二人の破魔師」(後書き)

感想お待ちしております。

設定その1（前書き）

ようやく完成しました。

作中のエピソードの詳しい部分については、また別の作品か番外編で語ろうと想います。（あと後半のオリキャラ達は本編に出るかどうかが分かりませんので、悪しからず）

設定その1

碧陽帝国

人口：700万人

領地：地球

帝都：北海道（碧陽学園のあった場所）

元首：杉崎林檎

首相：杉崎くりむ

同盟：十異世界、レイラ、リベリオン、アーク

政体：一君民主制

帝徒会

国民から選出された4人の役員と皇帝一族から選出された1人の役員で構成される組織。お互いがお互いの監視役を務める碧陽学園の生徒会選抜システムを基にしている

なのはやはやての故郷とは別次元の地球に存在する単一惑星国家。核戦争後。侵略国家アークに絶滅寸前となっていた人類を杉崎鍵率いる元碧陽学園生徒会メンバー及びその関係者によって統治。3つの異世界（十異世界レイラ、リベリオン）と同盟を組み、苦戦の末アークとの戦争に勝利。

後に単一惑星国家として成り上がった。

杉崎家は皇帝一族として君臨。現在は国家の家族経営だが、基本的には一君民主制が政体である。
建国後は、異世界の技術により急速に文明が再建された。
また建国者が杉崎鍵なので、重婚や同性婚、血族婚が認められている。

杉崎鍵

性別：

年齢：45

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：帝国帝徒会副会長 国防軍永久名誉元師

階級：大元師

魔力値：不明

魔法術式：リベリオン式 + 地球上の様々な魔術体系を組み合わせたオリジナル術式（杉崎式）

魔力光：虹色

能力：逃亡群鷄

本来は「強敵や困難に遭遇すると逃げ出してしまう」という最弱能力だが強固な意志を持つことで「あらゆる攻撃を回避しどんな困難

な状況でも抜け出せる」という能力へと変わる。

保有技能：逃亡群鶏 魔法 魔術 剣術 武術 気孔闘法戦略指揮
政略指揮 料理 洞察力 処世術 事務処理 ハツキング 戦術
指導

先見力 読心術

高校時代。「十異世界」「レアイラ」「リベリオン」等三度の異世界での冒険で、能力と破魔の力に目覚める。

高校卒業後。守の予知した核戦争を回避する為、守や善樹、佐鳥達と共に世界中を飛び回っていたが、失敗。

後に現れた侵略国家アークに対抗する為、「十異世界」「レアイラ」「リベリオン」の三界に協力を申し込み、生き残った人類を纏め上げ、抵抗軍を組織。苦戦の末、アークとの戦争に勝利。

後に単一惑星国家「碧陽帝国」の建国者となる。しかし、皇帝の地位は林檎に授け、自身は永久名誉元師を名乗り、政徒会副会長の座へと就いた。

建国後は、くりむ、知弦深夏、真冬、林檎、飛鳥巡、リリシアと結婚。8人の子供を授かっている。

杉崎くりむ

性別：

年齢：46

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：帝国帝徒会会長
帝国首相

身長：170cm

バスト：F

保有技能：洞察力 観察眼 政略指揮 カリスマ

肉体的に大人へと成長したくりむだが、中身は相変わらずの子供っぽい性格で、それ故に物事の本質を見抜く力に長けてる
高校卒業後。知弦と共に大学に進学。そこで宮代奏と出会い親友となる。

大学卒業後。親元の会社へと就職。
その直後。核戦争によって会社は倒産。両親にも先立たれ、人生の絶望感に立たされていた

しかし。抵抗軍でアークと必死に戦う深夏や知弦の姿に勇気づけられ、他の絶望感に苛まれた人々を励ましたり、真冬や林檎達と共に孤児の世話や病人の看病等を行い、その持ち前の明るさや天然さで周囲の人間に元気を与えていた。

建国後は、帝国首相として政徒会の皆を振り回しながらも、一生懸命政治に取り組んでおり、そのカリスマ性から国民にはアイドルのように慕われている。

鍵との間には、娘を1人授かっている。

杉崎知弦

性別：

年齢：46

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：帝国政徒会書記
紅葉戦団団長

階級：大将

魔力値：不明

魔法術式：西洋式

魔力光：深紅

保有技能：魔術 暗殺術 戦略指揮 政略指揮 呪術 洞察力 催眠術 事務処理 推理力 処世術 先見力
銃術 読心術 占星術

高校卒業後。くりむと共に大学へと進学。そこで宮代奏と再会。大学卒業後。起業するも核戦争により破綻。

くりむや皆を守る為、奏と共に抵抗軍では固有戦団「紅葉戦団」の指揮官としてアークと戦った。

くりむの成長に関しては誰よりも残念がっているが、親友である気持ちに変わりはないらしい。

建国後は、政徒会書記としてくりむの補佐を務めている。

鍵との間には息子を1人授かっている。

杉崎深夏

性別：

年齢：45

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：帝国政徒会副会長 椎名真拳初代師範代

階級：大将

椎名真拳：深夏が対侵略者用に編み出した対人多用拳法。その技のほとんどが漫画やアニメ、ライトノベル等の創作物から引用されている。

保有技能：武術 気孔闘法 戦術指導 剣術 椎名真拳 催眠術 銃術

高校卒業後はOLとして働きながら、義父を含めた家族四人で幸福に暮らしていたが、核戦争によって両親を失い、真冬を守る為に抵抗軍でアークと戦い続けた。

抵抗軍内では、兵士達に気孔闘法を教えたりしていた。

建国後は、政徒会副会長に就任。と同時に道場を開き、自らが編み出した拳法「椎名真拳」の初代師範代となった（因みに門下生は、総勢約千人余りである）

鍵との間には娘を1人、授かっている。

椎名真冬

性別：

年齢：44

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：帝国政徒会会計

全世界腐女子連盟会長

保有戦団：真冬騎士団

真冬の元クラスメイトやその関係者で構成される戦団。真冬に絶対の忠誠を誓っている。鍵は今でも騎士団共通の敵。

階級：少将

保有技能：クラッキング プログラミング 護身術 ハッキング

執筆

高校卒業後。姉と同じ会社へと就職。5年間の義父との生活で男性恐怖症は改善された。

抵抗軍では、くりむや林檎達と共に孤児の世話や病人の看病をしていたが、その一方で優秀過ぎる姉に劣等感を抱いたりしていた。

しかし。鍵の帰還後。アークとの最終決戦では、その類い希なる八

ツキング能力で敵の情報網を狂わせ、抵抗軍を勝利へと導いた。
建国後は、帝国政徒会会計と全世界腐女子連盟会長に就任。鍵も善樹も妻持ちなのを知りながら、未だに二人のCPを妄想。執筆している（二人のCPは腐女子連盟内で、最も人気がある）
鍵との間には息子を1人授かっている。

杉崎巡

性別：

年齢：45

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：「放送部」部長

保有技能：カリスマ 武術 銃術 演技力

高校三年時。念願の人気投票獲得によって生徒会会計に就任。

高校卒業後は、本格的に芸能活動を始め、三年後にはハリウッドデビューした。演技力は抜群に上手くなったものの、音痴だけは治らなかつた。

抵抗軍では、兵士の1人としてアークと戦った。

建国後は、自ら国家放送局「放送部」部長に就任
鍵との間には息子を1人授かっている。

杉崎林檎

性別：

年齢：44

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：帝国初代皇帝
国家元首

保有技能：カリスマ

洞察力 観察眼

高校二年時。飛鳥と共に碧陽学園に転校。生徒会副会長に就任。翌年には義兄の意向を継ぎ、会長へと就任。高校卒業後は、飛鳥と同じ大学に進学していた。

抵抗軍では、くりむや真冬達と共に孤児の世話や病人の看病等を行い、その天然さで周囲に元気を振りまいていた。建国後は、義兄の命により皇帝の座に就く。くりむと同等のカリスマ性を持ち、国民からはアイドルのように慕われている。鍵との間には、娘を1人授かっている。

杉崎飛鳥

性別：

年齢：45

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：「未知の会」会長皇帝専属世話係

魔力値：不明

魔法術式：東洋式

魔力光：青紫色

保有技能：戦略指揮 魔術 呪術 諜報 処世術 洞察力

高校三年時。林檎と共に碧陽学園に転校。副会長に就任。抵抗軍では、指揮官として部隊を率いていた。建国後は、オカルト研究機関通称「未知の研」の会長を務め、皇帝専属世話係として、林檎の補佐をしている。鍵との間には娘を1人、授かっている。

杉崎リリシア

性別：

年齢：46

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：新聞部部长

『藤堂新聞』社長

保有技能：諜報 読心術 洞察力 ハッキング

高校卒業後。アメリカの大学に進学。苦手な英語を克服。

大学卒業後は、新聞社を立ち上げるも、核戦争により倒産。

抵抗軍では、偵察部隊の隊長を務め、アークとの最終決戦ではスパイとして暗躍した。

両親は核戦争により死亡

建国後は、新聞社を立ち上げると同時に国家諜報機関通称「新聞部」部長に就任。

鍵との間には息子を1人授かっている。

星野・ヘルズ・守

性別：

年齢：45

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：国防軍最高司令官レイラ異界外交官

階級：大元師

保有技能：未来予知 透視 サイコメトリー マインドリーディング
グ テレパシー 戦略指揮 豊聡耳 護身術

高校時代。「レアイラ」にて、自らの能力を完全覚醒させる
高校卒業後。核戦争を予知し、それを阻止する為に鍵や善樹、佐鳥
達と共に世界中を飛び回っていたが、失敗。
核戦争後は、名字を「星野」に改名し、鍵が三界同盟軍を引き連れ
てくるまでの抵抗軍のリーダーを務めた。
建国後は、国防軍最高司令官と異界外交官レアイラを務め、レアイラで知り
合った女性フェイトと結婚。娘を1人、授かっている。

中目黒・ルシード・善樹

性別：

年齢：45

出身：リベリオン

所属：碧陽帝国

役職：異界外交官風紀委員会会長杉崎教教祖リベリオン

魔力値：不明

魔法術式：リベリオン式 西洋式 東洋式

魔力光：青紫色

保有技能：読心術 魔法 魔術 剣術 武術 観察眼 戦術指導
銃術

リベリオンで退魔師と魔導師の間に生まれた破魔師。誕生直後にゼオンに利用されそうになった所を母親の次元転移魔法で地球に落とされ、中目黒家に拾われる。太古時代のとある神と悪魔の子孫の末裔でもあり覚醒すると背中に悪魔の黒翼と天使の白翼が左右対称に生える。

高校三年時。初の男子の人気投票獲得によって生徒会書記に就任。しかし、その半年後。ソロモン師団により異世界「リベリオン」に連れ去られ、そこで自分の出生の秘密を知り「破魔」の力を覚醒。高校卒業後。鍵や守、佐鳥達と共に核戦争を回避する為、世界中を動き回っていたが、失敗。

抵抗軍では、魔法資質のある兵士に魔法を教えたりしていた。建国後は、杉崎教を開祖し、帝国の治安維持組織「風紀委員会」会長と異界外交官に就任。「リベリオン」で知り合った魔導師の少女エリナと結婚。男と女の双子を授かっている

真儀留佐鳥

性別：

年齢：55

出身：地球（日本）

所属：碧陽帝国

役職：教育委員会会長

階級：大将

保有技能：武術 読心術 戦略指揮 処世術 先見力 政略指揮

洞察力 観察眼 処世術 ハッキング

碧陽時代。鍵達の異世界での冒険を知らされ、守の予知した核戦争を回避する為に彼らに助力したが、失敗。

核戦争後。抵抗軍の指揮官の1人として活躍。

建国後。核戦争により壊滅状態となっていた企業を再編し、教育委員会に変え、会長の座に就任した。因みに未だ独身でもある。

十異世界

人口：1000万人

統治：生徒会

「生きとし生ける者全てを統べる会」の会長。五強神とアルファによって構成される十異世界を見守る集団。

同盟：碧陽帝国、レイラ、リベリオン、アーク

鍵が生まれて初めて訪れた異世界。

古代戦争によって滅亡の危機に直面した10個の世界が、互いに補うように生まれた世界。各々の世界の生き残りである10の民族が

生活している。

民族間の紛争や全次元を喰らう存在オメガの脅威にさらされ、滅亡の危機を迎えていたが、鍵の活躍によって時空間が安定。生徒会の発足により、民族間の争いも無くなり各々の民族が共存共栄する世界となった。

アークとの最終決戦では抵抗軍に加勢。後に碧陽帝国と同盟関係になる。

五強神

10の民族に伝わる古代遺産と鍵の魔力により造り出された5人の魔神。高校時代の生徒会メンバーのイメージで造られてる。十異世界の時空間のバランスを保っている。

カイロス

性別：

年齢：不明

出身：十異世界

所属：十異世界

属性：闇 光

魔力値：不明

魔力光：金色と黒色

イメージ元：杉崎鍵

闇と光の力を司る魔神。鍵のイメージを元に造り出された筈なのに、その性格は本人とは真逆。例えるなら、鍵からボケの部分を抜き取り、尚且寡黙にしたような性格。

アリエ

性別：

年齢：不明

出身：十異世界

所属：十異世界

属性：土 木

魔力値：不明

魔力光：茶色と緑色

イメージ元：桜野くりむ

土と木の力を司る魔神。外見も中身もくりむと同じだが、本気で怒り出すと周囲に災厄を招く恐れがある危険娘。

メアト

性別：

年齢：不明

出身：十異世界

所属：十異世界

属性：雷 鋼

魔力値：不明

魔力光：黄色と銀色

イメージ元：紅葉知弦

雷と鋼の力を司る魔神。機械と名の付く物なら、どんな物でも操ることが出来る。知弦と同じドS精神の持ち主。

ウル

性別：

年齢：不明

出身：十異世界

所属：十異世界

属性：炎 風

魔力値：不明

魔力光：紅色と黄綠色

イメージ元：椎名深夏

炎と風の力を司る魔神。深夏と同じバトルマニアで、1日1回誰かと闘わないと気が済まないらしい

ノル

性別：

年齢：不明

出身：十異世界

所属：十異世界

属性：氷 水

魔力値：不明

魔力光：白色と青色

イメージ元：椎名真冬

氷と水の力を司る魔神。全世界腐女子連盟の会員で会長代理でもある。

アルファ

性別：（ ）

年齢：不明

出身：十異世界

所属：十異世界

属性：光 闇 土 木 雷 鋼 炎 風 氷 水 無

魔力値：不明

魔力光：紅色 青色 緑色 白色 黒色 無色

古代戦争時代。各々の世界が用いた最終兵器の暴走によって生まれた時空の歪み オメガより生まれた存在。存在するだけで時空間を歪ませる力を持ち、全次元を崩壊させようとしていたが、鍵と五強神の活躍により改心修正。五強神と同じ十異世界の時空間のバランスを担う存在となった。

何故かその姿は高校時代の佐鳥に似ている。

レイアラ

人口：3億人

代表者：アンジェリカ・オツペンハイマー

同盟：碧陽帝国 十異世界 リベリオン、アーク

鍵や守、深夏が訪れた異世界。

人口の約3分の1が能力者で、長年無能力者と能力者の争いが続いていたが鍵や守、深夏の活躍により一応は沈静化。

現在は、お互いに和睦を結び、共存共栄の道を進もうとしている。

アークとの最終決戦時には、抵抗軍に加勢。

後に碧陽帝国と同盟関係になる。

アンジェリカ・オツペンハイマー

性別：

年齢：36

出身：レアイラ（対能力者機関）

所属：レアイラ

能力名：異能殺し

触れただけであらゆる異能の力を打ち消す能力。この能力の持ち主はあらゆる能力の影響を受けないし、能力により引き起こされた事象をも、打ち消す事が可能。

更にこの能力は物体に宿す事が可能で、宿された物体はこの能力と同等の効果を発揮する

役職：レアイラ共存共栄委員会「有無の会」会長

保有技能：護身術 異能殺し カリスマ

対能力者用能力者として造り出された人造生命体の少女。

性格は争いごとを嫌う平和主義者で、無能力者と能力者の争いが嫌で響と共に世界中を逃げ回り、能力者と無能力者の両方に命を狙われていた。

しかし鍵や守、深夏の奮闘に感銘を受け、自らも争いを止める為に戦線へと赴いた。

鍵達の帰還後は、無能力者と能力者の共存の為の橋渡しとなるべく「有無の会」を発足。

響とも結婚し、双子の姉弟を授かった。

響・オツペンハイマー

性別：

年齢：45

能力：残響死滅

あらゆる死を再生する能力。生物の死だけでなく物体や事象等の死に終わり再生させる事が可能どんなものでも死滅させられる能力だが、鍵やアンジェリカのような例外も存在する。

出身：レアイラ（辺境）

所属：レアイラ

役職：医師

保有技能：残響死滅 医術 薬学 武術

独特な口調の持ち主で、一人称は『我』

幼い頃より発現させてた能力のせいで、周囲の人間から迫害を受け続け、その度に周りの人間を村ごと消滅させ、他人と関わることを極端に嫌っていた。しかし、自身の能力が効かないアンジェリカは別で、孤独を避ける為に彼女の護衛として共に旅をしていた。自身を倒してくれる存在を探していく内に、鍵に目を付ける。

無能力者と能力者の争いには興味を持っていなかったが、アンジェリカが攫われた事を利用し、救出に向かおうとして鍵の前に立ちはだかり、殺させようとしていたが、逆に諭され、アンジェリカ救出に加わった。

鍵達の帰還後は、医師となり、アンジェリカと結婚。二児の父親となる。

星野・ヘルズ・フェイト

性別：

年齢：47

出身：レアイラ（辺境）

所属：碧陽帝国

役職：レアイラ共存共栄委員会「有無の会」会員異界外交官
碧陽帝国国防軍第五大隊「エクスカリバー」隊長

階級：大佐

保有技能：状況判断力 戦略指揮 戦術指導 剣術 武術 洞察
力 暗殺術

幼い頃両親を能力者によって殺された為、能力者を深く憎んでいたが、守と出会った事で能力者達の苦悩を知り、鍵達と共に無能力者と能力者の争いを止める為に奮闘したその戦闘力と状況判断力は、並の能力者では歯が立たない程である。終戦後は、「有無の会」の会員となる。

アークと侵略者の最終決戦時には、抵抗軍の兵士として部隊を率いた。

建国後は、碧陽帝国に移住し、大佐として国防軍に入隊。それと同時に異界外交官となり、守と結婚。娘を1人授かっている。

リベリオン

人口：3億人

代表者：エリナ・中目黒・ルシード アルホルス・グランドレン

同盟：碧陽帝国 十異世界 レアイラ、アーク

善樹の出身世界。

太古の時代、神々と魔族の戦争により一度滅んだ世界。

人類のほとんどが神々の子孫（退魔師）と魔族の子孫（魔導師）に分けられている。
ゼオンの策略によって、魔導師達は長年迫害に合っていたが、鍵や善樹の活躍によってその蟠りも取れ、現在は和睦を結び共存共栄の道を歩んでる
アークとの最終決戦時では、抵抗軍に加勢。
後に碧陽帝国と同盟関係になる。

中目黒・ルシード・エリナ

性別：

年齢：44

出身：リベリオン（ソロモン師団）

所属：碧陽帝国

魔力値：180万 不明

魔法術式：リベリオン式

魔力光：赤銅色 黄金色

黄金の魔女ベアトの末裔覚醒すると、茶髪が金髪に黒目が赤目に変化する

魔導師の対退魔師用集団「ソロモン師団」で生まれ、仲間と共に世界中を放浪していた。

狡猾な性格で、当初は善樹の事も利用する事しか考えていなかったが、彼の純粋な性格に惹かれ、好意を抱く。

アークとの最終決戦時には、抵抗軍の兵士として戦った。
建国後は、碧陽帝国に移住し、善樹と結婚。息子を1人授かっている。ゼオン

性別：

年齢：不明

出身：リベリオン

所属：不明

天空神ゼウスの末裔。

覚醒すると、三つ又の矛を持ち、天候を操る事が出来る。

普段は温厚な性格のふりをしているが、本性は誰よりも狡猾で残虐。前世において、神々と魔族の戦争を引き起こした張本人でもある。

普段は温和な性格のふりをしているが、その本性は誰よりも狡猾で残虐。

魔導師達が迫害される原因を作り、全世界を支配する為に破魔師の善樹の利用を企てていた。

しかし、鍵との戦いに敗れ、それは失敗。
死亡したと思われるが……。

アーク

人口：2000万人

同盟：碧陽帝国、レアイラ、リベリオン

代表：ルドルフ

別世界に存在するもう一つの地球から、鍵達の世界の地球へと攻めて来た侵略国家。龍帝アドルフの絶対君主制の元、全世界の支配を企んでおり、次元融合機に使って次々と侵略した世界を取り込んでいた。

鍵達の世界にも攻めて来たが、抵抗軍と三界同盟軍（十異世界、レアイラリベリオン）の前に敗北アドルフの暴走によって滅びようとしていたが、鍵達の活躍に救われる。取り込んでいた世界を元に戻した後は、碧陽帝国に忠誠を誓い、同盟世界となる。

アドルフ

性別：不明

年齢：不明

アークを支配していた暴君。生体改造技術により不老長寿の肉体とアーク人全員の思想を統一し、次元融合機を使って全世界の支配を企んでいた。当初は鍵達地球人の事を「猿」と称して見下していたが、先遣隊として送り込んでいた部隊が、無惨に敗退したという情報を聞きつけ、地球に送り核戦争を引き起こさせたその後は、異世界中に散らばっていた部隊を集め再度地球へ戦争を仕掛けたが、抵抗軍と三界同盟軍（十異世界、レアイラリベリオン）の前に完全敗北。

その事が認められず、アークそのものと一体化し全世界を滅ぼそう

としたが、鍵の前に敗れる。

ルドルフ

性別：

年齢：400

アドルフの實の弟にしてアークの現皇帝。

アークNo.2の実力者で、部隊を率いて抵抗軍に戦いを挑んだが、鍵の前に敗れる。

しかしその事がきっかけで、洗脳が解け、抵抗軍に協力した。

終戦後は、アークの皇帝の座に就き、地球再興に全面的に尽くした。

設定その1（後書き）

修正、補足しました。

ユーノ・スクライアの選択(前書き)

2ヶ月ぶりの投稿です。

ユーノ・スクライアの選択

鍵視点

「皆、食事の前に今日は大事な話がある。聞いてくれ」
「「？」」

夕食時。各々テーブルに並んで座り、いざ食事を開始しようとした時、俺は席を立って言った。

案の定、皆首を傾げていたから、俺は事情を説明する。

「今日俺がとある世界から男の子を1人、連れ去ってきたのは、知ってるな？」

「ええ。確か破魔の力を持った子でしょ？例の組織の暗部に襲われていた所をキー君が助けたっていう」

「ああ」

知弦の言葉に俺は頷いた最もユーノを連れ帰った後、速攻でボコボコにされたわけだが（二回ぐらい死刑にされたし）

「それで？その子がどうかしたの？」

「いや、実はな。その子と話し合った結果、その子が俺に弟子入りしたいって言い出してな」

「……それで？」

「いや、俺としては全然構わないんだけど。皆の意見も聞きたいと思ってるな。どうかな？」

「そうねえ……」

顎に手を添え、考え込む知弦。他の皆も考え込む中、子供達の方はというと……

「ねえねえ！？どんな子が来るのかな！？」

「強い奴だといいな」

「僕は美少年を希望しますです」

一方その傍ら、彼女達に思い切り突き飛ばされ、1人尻餅をついている俺と唾然としている子供達

.....
あれ？前にもこんなことあったような。って、今はそんなことより！

「おいこら、そのハーレムメンバー共！なんだその反応！なんかおかしくね！？なんか色々とおかしくね！？」

「全く.....鍵つたら、何でもっと早く紹介してくれなかったのよ」

「そうよ。この子なら私達皆大賛成なのに。ねー？」

「「ねー！」」

「うん。賛成してくれるのは、ありがたいんだがそろそろユーノを解放してやれ。あと良い歳した大人が「ねー」とか言うな！恥ずかしくないのか!?!」

.....というわけで、予想に反してユーノは杉崎家に大歓迎されたのでした(あとでこいつら全員説教だな)

ユーノ視点

「ひ、酷い目に遭った」

僕は先程までの天国だか地獄だか分からない境遇から解放され、思い切り溜め息を吐いた。何せ入っていった瞬間、八人の女性に抱き締められたり頭撫でられたり、触られたりしたのだから。年頃の少年には、色んな意味で、きつかった。

「すみません。うちの母親達が御迷惑をお掛けして」

と、その時。黒髪短髪で眼鏡を掛けた少年が話しかけてきた。

因みに師匠は今、例の八人の女性 師匠の奥様方と何やら口論して

いた。

「い、いえ、大丈夫ですそれより、あなたは？」

いや、本当は知ってるんだけど。流石に初対面なのに名前を当てられたら変に思われるから、確認の意味も込めて質問した

「ああ！そういえば、自己紹介がまだでしたね。僕は杉崎家の長男杉崎智也と言います。以後お見知り置きを」

「あつ、此方こそ、よろしくお願いします」

そう言っつて智也さんは右手を前に差し出し、慌てて僕も左手でそれを握る

うーん。なんとというか、大人っぽい人だな。とても一つ違いとは思えない何でだろ？僕はもつと年上のクロノにだつてタメ口なのに。

まあ、あいつを年上として見たことなんてほとんどなかったけど。

だつとあいつ、子供っぽいし、背丈だつてそんなに変わらないしね。

「……っ」

「どうしたの？クロノ」

「……いや、何でもない何故だか今非常に腹が立つ事を誰かに言われた気がしたただけだ」

「はあ」

「ハハ、そう緊張しなくてもいいですよ。これから一つ屋根の下で暮らすんですから」

「はあ」

「あつ！そうだ。他の子達も紹介しないといけませんね。ほら皆、ユーノ君に挨拶しなさい」

智也さんが呼び掛けると8人の男女が集まってきて、まず最初に話しかけてきたのは、8人の中で一番背の低い淡色の髪の毛の頂点からアホ毛がびよこんと生えてる少女だった。

「杉崎家長女杉崎くりすだよ！よろしくね。ユーノ君」

「あ、はい。よろしくお願ひします」

「……………うん。分かってたけど。こう改めて見ると、長女というより未っ子にしか見えないな。」

「あなたは新入りなんだから、私の事は女王様もしくは御主人様と呼ぶように」

「は？」

「はいはい、くうちゃん初対面の人にそういうこと言っちゃいけません」

「ぶ〜。何よ！智也だって、クラスの女の子に時々呼ばせてんじやない。私もたまには呼ばれたいの！」

「はいはい。私が後でたっぷり呼んであげますから」と言つて、智也さんはくりすさんを連れていった

「……………」

「……………あれ？おかしいな？暑くもないのに、汗が出てくるよ。はははおかしいな。」

僕が冷や汗を掻いていると次に現れたのは、腰まである茶髪を後ろ手に一つで纏めた髪型の少女だった。

「杉崎家次女杉崎夏希だよよろしくな」

「うん。よろしく」

「それにしてもお前すげえな。あの父さんに弟子入りさせてもらえるなんて」

「え？そうなの？」

「ああ。父さん弟子はとらない主義だつて言つてたからな」

「へえ、そうなんだ」

少し関心していると、今度は色白の肌に色素の薄い短髪の少年が出てきた

「初めまして。杉崎家次男杉崎冬樹と言います。趣味はゲーム、ネット、執筆とインドア系の事なら何でも聞いて下さいです」

「あ、う、うん。よろしく」

僕はぎこちなく笑って見せた。というのも、この眼からの情報に寄ると、この子は……

「……………／／／」

「え、えと、どうして僕の顔見て紅くなってるの？」

「いえ、ユーノさん結構僕の好みだなあって」

「え」

「どうですか！？ユーノさん！後で僕と一緒に愛の語りでも」はいはいそれはまた今度にしような「い、痛いです。夏希お姉ちゃん。耳を引っ張らないで」

冬樹君は夏希によってすごすごと退場させられていった。

……………。

「あはは。冬樹つてば、相変わらずよね」

「うう、ど、扉お姉ちゃん……………」

と、今度は腰まである黒髪の少女と、その少女より更に幼い髪の右側にリボンを結んだ少女が、黒髪の少女に寄り添いながら出て来た。「ほらほら、大丈夫だから。あっ、あたしは杉崎家三女杉崎扉。よろしくね、ユーノ。で、こっちゃんが」

黒髪の少女 扉が促すとリボンの少女は、もじもじと恥ずかしそうに本当に恥ずかしそうに自身の名を口にした。

「え、えっと、す、杉崎家四女、す、す、杉崎みかん、です。10才です」

「う、うん。よろしくねみかん」

「ひゃう！？こ、こ、こちらこそ、よ、よろしくお願ひしまひゅあ、咬んだ。」

「あはは。ごめんね、ユーノ。この子、知り合い以外だとまともには喋れなくて」

「あ、ううん。大丈夫。それより、みかんの左にいるのって何？」

「「え？」」

今僕の視界には、みかんに右に浮いている尻尾が何本も生えてて前左足にリボンを巻き付けた半透明の狐が見えていた。

いや、本当は分かっているんだよ。その狐の正体は。だけど、僕は人生において一度も“それ”を見たことはないし、迷信と思っていたから。

と、そんな時頭の中に声が響いた。

（小僧。貴様、私が見えるのか？）

「!?!」

魔導師の使う念話とはまた違った声に僕が戸惑っていると、みかんは若干瞳に期待の色を乗せながら、問いかけてくる。

「あ、あの!?!」

「何？」

「ほ、本当に、本当に、久遠の事が見えるんですか!?!」

「久遠？」

「みかんの隣にいる化狐のことよ」

みかんの言葉を扉が補正してくれる。しかし次の瞬間には狐 久遠と言いつ争いを始めてしまった扉とそんな二人？を諫めようとするみかん。

しかし哀しいかな。久遠の姿は見えてもさつきみたいには話しかけれない限り、何を言ってるのか分からない。

だから僕の眼には、みかんと扉の2人が一方的に喋ってるようには見えない。

「おやおや、また始まってしまいましたね」

「あの、智也さん。あれ止めなくてもいいんですか？」

みかん達の方を指差しながら、問い掛けるが、智也さんは気にした様子もなく

その後師匠の奥様方とも挨拶を交わし合い、皆で騒がしく食事をしたのだった。

クロノ視点

「くっ、なんということだ……」

鳴り響く警告音に僕は奥歯を噛み締める。

今この艦は、暴走したロストロギア「トリックスター」によって、転送も通信も断絶した状態になっていた。

僕がどうすればいいのかと頭を悩ませていると、管制主任のエイミイが歓喜の声を上げる。

「やった！クロノ君、通信繋がったよ！今リンディ提督の艦が来てくれてるって！」

「！本当か！？」

それと同時に扉が開き、フェイトが慌てて入ってきた。

「クロノ！転送ポート、なんとか使えるようになったよ」

「！そうか。……よし！総員に告ぐ！全員直ちに脱出の用意を！」

「了解！」

数分後

「クロノ君！艦内にいた局員全員。転送完了したよ」「了解。僕達も早く脱出す」

と、言いかけた時。一際大きく鳴り響く警告音。慌てて掛けてくるフェイト。

「クロノ！大変だよ！」

「どうした!?」

「転送ポートが故障してて。あと2人分しか」

「?!?」

この艦内に乗っている人間は、僕、エイミー、フェイトの三人。つまりこの内の誰か1人は犠牲になるということ。

「そ、そんな。どうすれば……」

「……………」

「クロノ？」

戸惑いを見せるエイミー怪訝な表情を浮かべるフェイト。そして決意を固めた僕は、ある提案を告げた。

「エイミー、フェイト。僕が犠牲になるから、2人共早く脱出しろ」

「な、何言ってるの!? クロノ君！」

「そつだよ！クロノ！」

「議論を交わしてる余地は無い。2人共早く脱出を。これは……命令だ」

叫び声を上げる2人を窺める。そんな時、通信画面が開き、母さんの焦燥感に満ちた顔が映し出される。

「クロノ！馬鹿な真似は止しなさい！」

「母さん……」

「私が必要あなた達全員助けてあげるから！だから、諦めちゃ駄目よ！」

「……残念ですが、そんな時間はもう、ありません」

「クロノ！」

叫び声を上げる母さんを無視して、通信を閉じる

そして再度2人に告げる

「さあ、2人共。早く脱出を」

「嫌！嫌だよ！クロノ君！」

再度、2人に脱出を促すと、エイミイが泣きついてきた。

「エイミイ……」

「我が儘を言うな」

「嘔吐き！クロノ君の嘔吐き！結婚しようって！これが終わったら結婚しようって言うてくれたじゃない！クロノ君の嘔吐き！」

そう……。僕とエイミイはこの任務が終われば結婚する約束をしていた。しかし……

僕は泣きじゃくるエイミイの頭にそつと手を添えた。

「！クロノく……っ!？」

エイミイの顔が苦痛に歪む。そして彼女の鳩尾には僕の拳が。

「すまない……」

「クロノく……」

崩れ落ちるエイミイの腰に右腕を回し、体を支える。

「エイミイ！クロノ！どうして!?!?!」

詰め寄って来たフェイトにも、鳩尾に一発。気絶した2人を抱えて僕は転送ポートへと歩き出した

「よし。これで」

転送ポートまで来た僕は、エイミイとフェイトを転送するべく魔法陣の上に置き、装置を起動させる。

「エイミイ。結婚の約束守れなくてごめん。それと今までこんな不甲斐ない僕を支えてくれてありがとう」

「フェイト。君と義兄妹になれたこと。僕は誇りに思ってるよ。母さんと仲良くやってくれ」

その傍ら、僕は2人に“今生の別れ”の言葉を掛け、
「愛してる」

最愛の女性と最愛の義妹の頬にキスをした。

そして装置が作動し、2人の姿が掻き消える。と同時に、転送ポートはその機能を完全に停止した

(母さん。先立つ親不孝を許して下さい)

(父さん。一足先にそちらに伺います)

崩壊する艦内で僕はただ1人、ここまで育ててくれた最愛の母と幼い頃に死んでしまった憧れの父に心中で言葉を掛ける。
その瞬間。真っ白な閃光が視界を覆ったかと思うと。

僕の意識は闇へと墜ちた

「ああ……なんてことなの……」

リンディ・ハラオウンはその場に膝から崩れ落ちる。

彼女の目の前のモニター画面には、

閃光と爆発と共に消えていく艦船『アースラ』の映像が映し出されていた

エイミイとフェイトの二名を収容したリンディの艦は、中規模次元震の発生を確認。すぐさま安全圏まで退避。直後『アースラ』は閃光とともに爆発。その振動は周囲の次元空間を揺らし続けた。

「次元震、もうすぐで収まります！」

「幸いにも次元断層の発生は確認されません！」

管制官の言葉と共に、閃光は消え去り、揺れも治まって、モニター画面内の『アースラ』があつた場所には相変わらず藍色の空間が広がっていた。

「……アレックス！リンディ！被害状況の報告を！」

艦長としての立場からリンディは悲しみを抑え気丈に振る舞って、管制官の2人に指示を飛ばす

しかし彼女の心中では、“13年前。闇の書事件において、アルカンスィエルの空間歪曲の中に消え去ったクライド・ハラオウン”のこ

とが思い出され大切な家族を失った悲しみと救えなかった怒りで満たされていた。

(あの子達になんて説明すればいいのかしら……………)
リンディは悲しみと怒りに心満たされながら、医療室で眠っているエイミイとフェイトへの事情説明に悩むのだった。

報告

本日未明。ロストロギア『トリックスター』の運用中だった艦船『アースラ』にて、事故が発生ロストロギアの暴走によって中規模次元震の発生を確認。幸いにも次元断層は確認されなかったものの、艦船『アースラ』は次元震発生と同時に起きた閃光と爆発と共に消失。周辺世界を搜索するも、欠片一つ発見されず結局捜査は打ち切られる結果となった。

尚、今回の事故において爆発前に艦内の人間はほぼ全員が脱出したことにより負傷者は0。死傷者は唯一艦内に残っていたクロノ・ハラウン提督だけとなった。

彼は今回の事故において自己を犠牲にして仲間を助けた勇気ある艦長として、管理局内で英雄視されるのだった

ユーノ視点

さて、僕がここ碧陽帝国に来てから、早くも数週間が経ちました。あれから僕は杉崎家の養子という形で、国内の学校に通わせてもらったり師匠の友人の守さんや善樹さんに能力や破魔の力の扱い方を

教わったりしています。そのお陰もあつてか、なんとか能力のオンオフ（通常視界と赤色視界）を切り替えることが、出来るようになった。

「ふう」

そして現在僕は、自身が通っている『国立碧陽学園』の遠足でピクニックに来ており、自由時間を利用して、草原内に立つ一本の樹木の木陰に腰を降ろしながら、物思いに耽っていた。

「皆、今頃どうしてるかな？」

考えるのは勿論、なのは達のこと。

きつと皆、僕のこと心配してくれてる。僕だって本当は今すぐ皆の所に帰りたい。

だけど、それは出来ない皆に迷惑がかかるから。

「あいたっ！」

等と考えていたら、突然後頭部に衝撃が走った。

後頭部を右手でさすりつつ、周囲を見回すと、足元にサッカーボールが転がっていた。

それを拾い上げると、前方から「おい！」

と茶髪ポニーテールの少女が駆け寄ってきた。

僕は、少女 杉崎夏希が目の前まで来ると、彼女にボールを手渡す。

「おお！サンキュー！」

と言って、ボールを受け取る夏希。そしてそのまま立ち去ろうとしたが、ふとその足が止まる。

「なあ、ユーノも一緒にサッカーやるえぜ！」

「え？」

「だってお前、休み時間とか家に一人にいる時、いつもつまんなさそうにしてるだろ？」

「そ、そうかな？」

まさか自分がそこまで物思いに耽っていたとは、思ってもみなかった。

「だからさ！たまには思いっきり遊んでリフレッシュしようぜ！何

悩んでんのか知らないけど、いつまでも一人でクヨクヨ悩んでたっ
てしょうがないだろ？」

「なっ！」と言って、ニコツと白い歯を見せて笑う夏希。

その笑顔に一瞬ドキツとするも、確かにこのまま悩んでてもしょう
がない管理局との問題は師匠が何とかしてくれるって言うし、今回
は子供らしく子供と楽しく遊ぼう。

と、既にそんな考え自体が妙に子供っぽくないなあと考えてしまい、
苦笑する。

「どうした？」

「ううん、何でもないよじゃ、行こっか」

「おう！」

僕はサッカーボールを持った夏希と共に、その場を去ろうと

「あれえ？ここどこっすかね？隊長」

「分からん。こりゃ誰かに道を聞くしかな」

「隊長？どうしたんで」

として、茂みの中から見えた三人の男達の姿に一瞬思考が止まっ
た。よく見ると男達の方もこっちを見て目を見開いてる

その男達とは水色と灰色のバリアジャケットに身を包み、手に杖
型デバイスを握った時空管理局の武装隊の局員だった

「あ、あれって」

「あ、あいつは」

愕然とする男達を余所に一人状況が理解できていないのか夏希が声
を掛けてきた。

「ん？どうしたんだよ？“ユーノ”急に固まったりして」

「「！？」」

その瞬間更に目を見開く男達。

「や、やっぱりあいつユーノ・スクライアだ！」

「どうします？隊長」

「慌てるな。奴もこっちに気付いてる。何気なく近づいて隙を窺うんだ」

隊長と呼ばれた外側が白内側が黒のバリアジャケットに身を包み、銃型デバイスを握った男の言葉に従い、他の男達がこっちに近づいてくる。

どうしよう!?!このままじゃ、夏希まで巻き込まれてしまう!なんとかしないと……………そうだ!

「夏希」

「何だ？」

「あのさ、悪いんだけど先行っててくれるかな。ちょっと急用を思い出して」

「んだよ。トイレか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど。とにかく!すぐに戻ってくるからさ。ねっ!」

「わ、分かったよ。……………んじゃ、先に行ってるから、さっさと戻ってこいよ？」

「うん」

僕が頷くと、夏希は皆の所へと戻っていった。

そして僕は 彼女とは正反対の方をを振り向き、駆け出した。

「ハア、ハア」

「追え!逃がすな!」

深い森の中。夏希と別れた僕はそのまま縦横無尽に駆け回り、男達と壮絶な鬼ごっこを繰り返しています。因みに背後からは銃弾やら魔力弾等が飛んできて、僕はそれを交わしながら走りつづける

……………というか、どうして管理局がここに?ここは管理局でさえ存在を知らない認知外世界なの?……………いや、彼等の話から察するに偶

然来たみたいだけど

「っ！？」

等と並列思考で思考を巡らせていたら、突如右足に激痛が走った。

「っああ！」

その衝撃で、僕は地面に前のめりに倒れてしまう

右足を見ると、脹ら脛の辺りに小さな穴が出来ており、そこから血が流れている。

「くっ」

そしてそんな僕を捕まえようと追いついて来た男達に囲まれてしまった。

「ハア、ハア、ちっ。手こずらせやがって」

「ああ。まさかこんな世界に逃げ込んでいたとはなあ、ユーノ・スクライア」

「こいつを連れて帰れば俺達全員上層部の方々に褒美貰えるぜ。

ひゃっほう！」

嬉々として僕を捕まえようと、迫り来る男達。

くっ、こんな所で捕まってたまるか！

「チエーンバインド！」

「っ！？」

僕が叫ぶと、地面から紅と翡翠の混合色の光の鎖が無数に飛び出し、男達に巻き付いていく。

「しまっ」

「まだだ！ストラグルバインド！」

驚愕する男達を余所に、僕は更に捕縛魔法を発動新たな無数の光の鎖が地面から生え、男達を絡め取り、更にその効果で彼らのバリアジャケットを強制的に解除させる。

「くそっ、油断した！」

男達の内の一人在悪態を吐く。他の者達も各々悔しげに顔を歪める中、僕は地面に座り込んだまま弾丸に撃ち抜かれた右足に治癒魔法を掛ける。

すると右足が紅と翡翠の混合色の光を浴び、傷口が徐々に塞がっていく。

「……………」
その光景を見て男達が啞然としている。僕も自らの右足を呆然と見つめながら思わず呟く。

「凄い……………」
僕は自分でやったことなのに、自分で歓心してしまった。

僕の右足は銃弾で撃ち抜かれたというのが嘘のように完治していた。唯一の痕跡は足元に広がった血の痕のみで

「すげえ……………」

「これが、これが“無限の英知”の力だということのか……………」
男達も口々に言葉を言い僕もそれに同意する。

そもそも治癒魔法というのは、人体が本来持っている再生能力を高めるというもので、軽傷であればすぐに治せてしまいがあそこまでの重傷であれば、どんな魔導師でも最低一時間はかかってしまう。例えシャマルさんであつてもだ。

なのに僕はそれを、あつという間にやり遂げてしまった。

「……………」

僕は改めて自分の力の協力さを実感し……………あれ？ちよつと待って。さっきなんか気になる単語が聞こえた気がしたんだけど

「?」

と思つて聞き出そうと男達の方に視線を向けた時僕は気づいた。彼らの中にあの隊長と呼ばれた男がいないことに。更に男達の表情が慌てるどころかどこか余裕すら感じさせる雰囲気があることに疑問を覚える。

「!?!」

その直後。後ろから草を掻き分ける音と人の気配を感じ、瞬時に身構えながら振り返ると、

「なっ」

「ふふふ」

「す、すまねえ。ユーノ捕まっちゃった」

そこには先ほどの隊長と呼ばれた男と、彼に右腕で抑えられ左手に握られた銃型デバイスを突きつけられてる夏希の姿だった。

「夏希！？どうしてここに!？」

「いや、その」

「ふふふ。なあにちょっとこの子も君に用があったみたいだから、連れてきてあげたんだよ」

「……」

男の言葉に夏希は俯く。くそっ、これじゃ迂闊に動けない。……

「おっと、動くなよ。魔法の発動も無しだ。少しでも何か妙なことすればその瞬間殺生設定の魔力弾がこの子の頭を撃ち抜く。これは既にデバイスに設定されてることだ」

「っ」

そんな……。それじゃ本当に何も出来ないじゃないか！

「ふふふ。それじゃまずはそいつらの拘束を解いてもらおうか」

「っ」

男は勝ち誇ったような笑みで、そう言ってきた。夏希も俯いたままである

……どうしよう……。このままだと確実に管理局の違法研究所に連れて行かれてしまう。……なんとかしないと。なんとかしないと。絶望的な状況に僕はなんとか解決策を見いだそうと悩む。……しかし何も思い付かない。くそっ、こんな時でも僕は何も出来ないのか!？せつかく能力に目覚めたのに!破魔なんて凄い力も手に入れたのに。

僕は自分の無力さに悔しくて悔しくてその場に膝を付き、拳を強く握り締める。

が、その時

「がっ!」

「「!?」」

突然男の左手に何かが当たり、その衝撃で彼の手からデバイスが弾け飛んだ。

「え？」

「ちっ、な、何が…… あああ！」

男が怯んだ隙に夏希も彼の右腕に噛みつき、拘束から抜け出した。

「動くな！」

男が噛まれた右腕をさすっていると、周囲から怒号が響いた。そして周りの木々から赤と黒を基調とし、菱形の中に漢字で『碧陽』と書かれた腕章の付いた軍服に身を包み銃器を構えた人間が次々と現れた。あ、あれは碧陽帝国防軍の人達!? どうしてこんな所に!?

「がっ、な、何を! 我々を一体誰だと」

「は、離せ! 貴様ら、こんなことしてただですむと」

「うるさい! いいから大人しくしろ!」

抵抗虚しく。男達は国防軍の人達に次々と拘束され、連行されいく。僕はあまりに突然の出来事にその光景をただ呆然と眺めていた。いや、眺めることしか出来なかった。

そして僕はそのまま地面に四つん這いになり、両手両肘について嗚咽を漏らし始めた。

「!? おい! 君! 大丈夫か!? しっかりしろ! おい!」

それに気づいた国防軍の人が声を掛けてくれるものの、僕はあまり悔しさと惨めさと無力感にただただ泣き続ける事しか出来なかった。

「……やっぱり例の組織の者達か？」

「はい。彼らの服装も例の組織の物だと確認されました」

「そうか……」

リリシアからの報告に思わず嘆息してしまう。

今日の午後。ユーノ達が遠足に行っていたピクニック場にて不規則な次元の乱れを観測。直ちに調査隊を送ると、そこで数人の魔導師が夏希やユーノに危害を加える場面に遭遇。これを速やかに処理し、魔導師共を拘束。尋問の結果、そいつらが例の組織の人間だということが分かった。

「で？そいつらは今どうしてるんだ？後でちょっと御礼参りをしたいんだが」

うちの愛娘と愛弟子に傷を付けようとした御礼をな。と、聞くと、リリシアはどこか哀れみの籠もった表情で答えた。

「彼らは現在、知弦の地下部屋にて、彼女の拷問を受けてますわ。加えて深夏の暴力に真冬 of 精神攻撃。更には巡の歌を聴かされてますわ。しかも適度なところで飛鳥に心身を回復させ、既に二時間以上も籠もりっぱなしですわ」

うわ、まじかよ。下手したら死刑より酷くないかそれ。っていうか、巡の歌って。あいつの歌はジャイアン並に酷いんだぞ最早一種の兵器みたいなもんなんだぞ。かわいそうに。まあ、同情はしないけど。途中からは智也も加わってましたわ」

親子揃って仲良く拷問かよ！

「……分かった。そいつらのことはもういい。それより夏希とユーノはどうしてる？」

「両名共、特に目立った外傷は見受けられませんでしたわ。夏希も今は広間でくりす達と談笑しています。ただ……」

「ただ？」

「ユーノの方は、どうやら精神的ダメージの方が大きく、帰ってき

てから自室に籠もりっぱなしのようなんですの」

「……まさかあいつ、今回の事件を自分のせいだと思ってるんじゃないだろうな」

俺は過去にあったユーノのデータから、今のあいつの精神状態を推測。

「！？いくら何でもそれは！？」

あり得ないという表情を浮かべるリリシアだが、ユーノの性格上それもあり得るかもしれないという表情に切り替わった。

と、そんな時。

通信画面が開き、林檎が焦燥感に満ちた声で叫んだ。

「兄さん！大変だよ！」

「どうした？林檎」

「さつき子供達がユーノ君の部屋に入ったんだけど、ユーノ君がいなくなっていたらしいの！」

「何だつて（何ですつて）！？」

「しかも机の上に、こんな物が」

俺とリリシアの驚愕を余所に、白い封筒を見せる林檎。

「まさか、あいつ。今回の事件に責任感じて出て行ったんじゃない」

「ええ！？」

「可能性はなきしにもあらずですわね。ん？ちょっと失礼。はい、こちらリリシア。……はい……はい……何ですつて！？」

「どうした！？リリシア！？」

「リリシアさん！？」

更に別の通信を聞いていたリリシアが驚愕の声を上げ、思わず俺と林檎は尋ねる。

「たった今連絡があつて邸内付近で未確認の転移反応が確認されたのそれも破魔の」

「！？」

反応を窺う。すると次の瞬間、皆、パツと笑顔になり、そして……

「おかえり！」

某違法研究所

ここは管理世界内にあるとある違法研究所。そこには管理局最高評議会がアルハザードの技術によって生み出され、現在は広域指名手配を受けている男『無限の欲望』ことジェイル・スカリエッティが自分の研究に没頭していた。

「フフ……ハハハハハハ！素晴らしい！この体は本当に素晴らしい！流石は『無限の欲望』と言われるだけはある！」

そう言つて高笑いを上げるジェイルだったが、その容姿は世間一般のものとは異なっていた。

藍色の長髪は真っ白に染まり、金色の目はそのままだが、全体的に神秘的なオーラが漂っていた。

「ククク、これでまた一步私の夢に近付くことが出来る。待っているが良い。“杉崎鍵”人間如きが神に逆らうことの愚かさを、今度こそたつぷり味合わせてやる！」

含み笑いを浮かべるジェイルだったが、そんな彼の元にウェーブがかつた薄紫の長髪をした女性 ジェイルの秘書であり彼の産み出した12人の戦闘機人『ナンバーズ』のNo.1ウーノがやってきた
「ドクター。施術の準備が出来ました」

「……分かった」

ウーノに案内されたジェイルは、とある実験室に入った。

その部屋には、大小様々な実験機具や装置があり中央には、青白く輝く宝石の入ったカプセルが二つと手術台に乗せられた“黒髪短髪の青年”が、寝転がっていた。

ジェイルは青年に近付くと、彼の身体を右手で軽くなぞった。

「フッフ、もうすぐだ。もうすぐ私の願いが叶う君にはその為の礎となってもらおうよ……ウーノ」

「はい」

ジェイルの指示に従い、装置を起動させるウーノジェイルはこれまで大小様々な器具を取り出し、その中からメスを取り出し、青年の体に切り込ませていく。

一方青年は硬く閉ざされた真つ暗な意識の中で、最愛の恋人と義妹への想いを褪せていた。

(エイミィ、フェイト)

ユーノ・スクライアの選択（後書き）

杉崎兄妹にアンケート！

ユーノ君の第一印象は？

「女の子」

「調教しがいのありそうな子」

「軟弱そうな奴」

「好みのタイプ」

「からかいがいのありそうな子」

「優しそうな人」

「同志」

「真面目そうな人」

「いや、一部の回答がおかしいんですけど！」

「「気のせい（笑）気のせい（笑）」

「嘘だ！」

まあ、ひぐらしネタはここまでにして。

感想お待ちしております

設定その2（前書き）

修正・補足しました。

設定その2

杉崎くりす

性別：

年齢：14

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園中等部二年生

容姿：姉弟の中で一番の低身長。肩まで伸びた淡色の髪。頭の先にちょこんと伸びたアホ毛。

能力：問答無用

あらゆる事象をなかつた事に出来る能力。

その危険性と過去の経験から、くりすは本当に必要な時以外は使用しないようにしている（というより普段からリミッターが掛けられている）

保有技能：問答無用 カリスマ 観察眼

鍵とくりむの娘であり、杉崎家の長女。

学生時代のくりむに似た容姿と性格で、何事にも必要以上に一生懸命。

長男の智也からは「くうちゃん」他の姉弟からは「くり姉」と呼ば

れてる

将来の夢は、くりむのようなナイスボディになること。

杉崎智也

性別：

年齢：14

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園中等部二年生

容姿：姉弟一の高身長

黒髪短髪 眼鏡

退魔術

智也と大樹が考案した退魔力を用いた魔術。

本来魔術の使用に必要な魔力の代わりに退魔力を使って（最もそれが可能なのは破魔師である鍵と善樹の息子の智也と大樹だけである）おり、全術式に退魔の効果が付属されるだけでなく、敵や周囲の魔力を吸収して退魔力に変換する効果も持つこの退魔術の発現に成功したのは、現時点では発案者の智也と大樹のみ。

術式：西洋式 杉崎式

保有技能：退魔術 銃術 剣術 人心掌握術 暗殺術 洞察力 読

心術

鍵と知弦の息子であり、杉崎家の長男。

鍵の性欲と知弦の狡猾さを併せたような性格であり、知弦に負けず劣らずのドS精神の持ち主で、扉と2人で『碧陽のドSコンビ』と呼ばれている

普段はくりすの世話係を務めている。

基本的には、誰に対しても敬語を使う。

杉崎夏希

性別：

年齢：13

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園中等部一年生

容姿：背中まである茶髪のポニーテール 貧乳

能力：閃閃風神

風を操る能力

保有技能：閃閃風神 武術 剣術 気孔闘法 椎名真拳

鍵と深夏の娘であり、杉崎家の次女。学生時代の深夏に似た容姿と

性格で高い戦闘能力を持ち主であり、深夏に負けず劣らずの戦闘狂。
将来の夢は鍵を超える事
姉弟の中では、真逆の性格の冬樹との相性が良い

杉崎冬樹

性別：

年齢：12

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園初等部六年生

容姿：色素の薄い短髪

白磁の肌

保有技能：クラッキング プログラミング 護身術 ハッキング
執筆

鍵と真冬の息子であり、杉崎家の次男。

真冬と同じBL読者であり同性愛者。

真冬に負けず劣らずの高い執筆能力とハッキング技術の持ち主。

姉弟の中では、真逆の性格の夏希との相性が良い

杉崎^{トア}扉

性別：

年齢：13

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園中等部一年生

容姿：腰まである黒髪のストレートヘア | 巨乳

魔力値：120万

魔力光：青緑色

魔法術式：東洋式 杉崎式

保有技能：魔術 護身術 呪術 洞察力 人心掌握術 読心術 諜報

鍵と飛鳥の娘であり、

杉崎家の三女。

学生時代の飛鳥に似た容姿と性格で智也と2人で『碧陽のドSコンビ』と呼ばれており、みかんの教育係を務めている。
みかんの守護霊である久遠とは犬猿の仲。

杉崎みかん

性別：

年齢：10

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園初等部四年生

容姿：茶髪短髪 髪の右側に結んだリボン

守護霊：久遠

みかんが飼っていた化狐が死後、精霊化した存在
みかんの事を大切に思っており、扉とは犬猿の仲
前左足にリボンを巻いている。

杉崎家の人間と霊能者以外には見えない。

保有技能：霊能力 カリスマ 観察眼

鍵と林檎の娘であり、

杉崎家の四女。

人見知りが激しく、身内と霊以外の相手には緊張して呂律が廻らな
い程である。

姉弟の中では、扉と一番仲が良いが、扉と久遠が犬猿の仲を密かに
悩んでいる。

杉崎リアン

性別：

年齢：11

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園初等部五年生

容姿：肩から少しだけ出た金髪 碧眼

能力：念写

自身のいる場所とは異なる場所の出来事を写真に収める能力。
遠距離だけでなく別世界の出来事も写真に収める事が出来る。

保有技能：念写 諜報

鍵とリリシアの息子であり、杉崎家の三男。

姉弟の中で、最も強く鍵の性欲を受け継いでいる
趣味は女の子の着替えを盗撮すること。

杉崎亮

性別：

年齢：11

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園初等部五年生

容姿：茶髪短髪 女顔

保有技能：歌 ツッコミ

鍵と巡の息子であり、杉崎家の四男。
巡と違って大根役者だが歌唱力は抜群。
姉弟の中では、もっぱらツッコミ担当。

星野・ヘルズ・マリア

性別：

年齢：12

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園初等部六年生

容姿：腰まである茶髪のツインテール 紅眼

能力：メモリーリーディング
相手の記憶を読み取る能力

保有技能：メモリーリーディング 毒舌

守とフェイトの娘。

幼い頃から他者の記憶を無意識に読み取ってしまう能力のせい、周囲から疎遠にされてきたが、現在は能力も制御出来ており、周囲との人間関係も大分落ち着いてきている性格は超が付く程の毒舌で特に親しければ親しい相手ほど辛くなる。

中目黒・ルシード・大樹

性別：

年齢：14

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園中等部二年生 風紀委員

容姿：白髪短髪 金眼

術式：リベリオン式

保有技能：退魔術 剣術 銃術 武術 洞察力

善樹とエリナの息子。

正義感が強く、『悪・即・斬』を信条としており父と同じく学園の治安組織に所属している。

智也とは幼等部から常に同じクラスで腐れ縁。

中目黒・ルシード・リナ

性別：

年齢：10

出身：地球

所属：碧陽帝国

学年：国立碧陽学園初等部四年生

容姿：黒髪長髪 金髪

魔力値：180万

魔力光：黒色

術式：リベリオン式

保有技能：魔法 魔術

善樹とエリナの娘であり大樹の妹。

兄の大樹とは違ってマイペースな性格。

みかんとは幼等部から同じクラスで大の仲良し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9590t/>

魔法少女リリカルなのは 無限の英知の一存

2011年11月5日03時18分発行